

後期オリエンテーション

芦名 定道

<演習の目的>

本演習は、おもに現代キリスト教思想（第一次世界大戦以降）を取り上げ、現在のキリスト教思想あるいはキリスト教思想研究の動向について共同研究することを目指しています。

現在、キリスト教思想そしてその研究は、現在複雑に細分化されいわば混沌とした様相を呈しており、個々の研究者から見て見通しのつかない状況にあります。こうした思想状況において、注目すべき主要な動向を明らかにし、新しいキリスト教思想研究の方向付けを行うというのが、本演習の最終目標になります。いくつかの大づかみなテーマを設定し、演習参加者の研究発表を軸にしつつ、関連する諸思想家についての思想紹介、新しい文献の書評なども組み合わせて、徐々に「キリスト教思想研究の現在」の全貌に迫りたいと考えています。

演習を構成する大テーマの設定は、初回のオリエンテーションで参加者の研究関心を踏まえて決定します。演習の具体的な進め方は大テーマごとに相談しますが、参加者には、個人研究の発表が前期後期一回程度（あるいは以上）求められます。前期と後期の最後に、大テーマ横断の発表会を行い、優れた発表は、報告書などに掲載し公表します。

<進め方>

研究会と演習の中間形態

研究グループによる月1回程度の研究発表（テキストによる、各自のテーマによる）

1. 研究グループの設定→グループごとに順番・日時を決める。
 - ・「研究生と聴講生などの研究発表会」
 - ・「近代形而上学と宗教」研究会
 - ・「宗教と言語」研究会
 - ・日本・アジアのキリスト教（アジア研究会と共通）：
2. 博士後期課程の院生（あるいはOD）をリーダーとして研究会を運営。

研究グループ全体の研究発表会を行い、論集やHPを作成する。研究会への参加度や発表会などにおける発表によって成績を評価する。
3. 演習のHPにて情報の共有：<http://blogs.yahoo.co.jp/sashinajp>

日本基督教学会・2013年・学術大会（西南学院大学）シンポジウム

相互交流するキリスト教研究とその課題**<内容>**

1. はじめに
2. 平和形成への貢献？
3. キリスト教とナショナリズム
4. むすび

1. はじめに

1. シンポジウム・テーマとポイント

- ・東アジアとは、日本の位置する場所、しかし、近代日本はこの場所といかに向きあってきたか。未だに「脱亜」を脱却できていない・・・か？
 - ・平和とは、戦争がない、たしかに、しかし、それだけか
 - ・平和に、戦争がないことを超えた意味があるとすれば、キリスト教は東アジアでいかなる存在意味を有しているか。
2. これは、東アジアに生きる多様なキリスト教の共通課題であり、様々な試みがすでに行われつつある。本発題は、その一つの試みとしての日中韓神学フォーラムを紹介し、そこから、東アジアの平和形成とキリスト教というテーマへアプローチすることを目的とする。
- すでに過去5回を数える、この神学フォーラムについては、本学会学会誌『日本の神学』にて報告されてきているが、その概要は次の通りである。
3. 韓国組織神学会と日本基督教学会・近畿支部を窓口として
東アジア神学の課題の共有と新しい神学思想の構築を目指す。英語における国際会議ではなく、各国の母国語での発表と通訳による交流（優秀な通訳スタッフの存在）。
4. 日韓
- ・第1回：日本・京都、2006年11月24日～25日、
「民族主義」を超えて——日韓の和解のためのアジア神学の模索」
 - ・第2回：韓国・ソウル、2007年11月23日～24日、「日韓両国のキリスト教受容」
5. 日中韓
- ・第3回：日本・京都、2009年6月26日～27日、「東アジアにおける宗教的挑戦」
 - ・第4回：中国・上海、2011年5月13日～14日、
「アジアは平和か？ 現代アジアにおける平和構築と神学的創意」
 - ・第5回：韓国
6. この発題の進め方
- ・神学フォーラムにおける議論からシンポジウムのテーマへ
 - ・神学フォーラムから見えてきた課題
 - ・まとめ、本学会として／に対して

2. 平和形成への貢献？

本シンポジウムのテーマは、「平和構築」であるが、これは、過去の日中韓神学フォーラムでも取り上げられた問題である。

日中韓に共有された問いの一つが「平和」である。今回、改めて、平和という問題から議論を始めて見たい。平和とは戦争がないということを超えていかなる積極的な意味を有しているのか、また平和形成には何が必要か。

7. エフェソの信徒への手紙2. 14。
「キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」
8. 和解としての平和
キリスト教が東アジアの平和に貢献できるかは、敵意に満ちた東アジアの現実に対して、「和解」の実現への道を示しうるかにかかっている。
9. たとえば、従軍慰安婦問題。女性国際戦犯法廷（2000年12月、東京）の試みにキリスト教はいかに応答してきたのか。
10. 国際戦犯法廷の目的、南アフリカの真実和解委員会

なぜ、法廷か。事実と責任の追及のため。和解は、事実の解明と責任の確定を前提とする。

11. 不当な扱いを受けた人の立場にたつ想像力。自分に落ち度があったために悪しき運命を招いたのではないかという自己否定の思いから、被害者を解放し、自己肯定を可能にする作業。あなたが悪かったのではない。責任を負うべきは別の所に存在する。

cf. 加害者の罪の赦しに対する被害者の恨みからの解放。

12. キリスト教思想から提言可能なこと。神と人間の和解にとっての十字架の意義。
事実と責任を明確化は、和解の前提となる。とすれば、この点を東アジアのキリスト教はキリスト教思想として強く主張する課題を有しているのではないか。東アジアの諸民族が和解するために何が必要かを明らかにすることを通して、平和形成へ寄与すること。

3. キリスト教とナショナリズム

日中韓神学フォーラムにおいて意識されてきたのは、東アジアのキリスト教がこの地域の平和形成に対して共通の課題を有しているだけでなく、置かれている状況が大きく異なることである。それを明確に示しているのが、ナショナリズムの問題である。

わたくしは、神学フォーラムの活動と並行して、東アジアのキリスト教とナショナリズムとの関わりについて、この間、比較研究を行ってきたが、この150年あまりの日本、韓国、中国のキリスト教の比較は、それぞれのナショナリズムとの関わりという観点から整理することが有益であるとの感触を得ている。あえて、おおざっぱな言い方をすれば、

13. 韓国：ナショナリズムの担い手としてのキリスト教

日本：ナショナリズムと距離を置く（あるいは対立する）キリスト教

中国：日韓のいわば中間（三自愛国教会と地下教会）

↓

東アジア諸国家の対立要因がそれぞれのナショナリズムの動向に規定されているとき、キリスト教はそれぞれのナショナリズムとどのように向き合うべきか。

14. 日本キリスト教と民族：

近代国家形成への精神的寄与、国家への批判的視点が希薄

15. 明治国家の宗教政策：近代国家の形態＋天皇制、信教の自由と国家神道

「神道≠宗教」論、宗教と習俗との関係をどのように理解すべきか。

16. 内村鑑三の二つのJ (Jesus, Japan) → 愛国とは？

17. 内村鑑三の戦争論：義戦論（日清戦争）から非戦論（日露戦争以降）へ

・日清戦争＝「義戦」（1892年の『日本人の天職』、1894年の「日清戦争の目的如何」）

日本の世界史的使命＝欧米の進歩的文明をアジアに紹介し、それによって保守的な東洋を啓蒙すること

→朝鮮の内政に干渉する清国と戦い、清国を啓蒙するのが日本の使命である

＝東洋の近代化を時代の要請と考え、明治政府の近代化路線（＝天皇制国家の形成）をキリスト教信仰によって精神的に補完するという姿勢

18. 「<義戦>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<正義>を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」（アメリカの友人ベル宛の書簡）、「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」（「戦争廃止論」）

19. 国家・民族の繁栄とは何か。戦争によって何を守るのか。

「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません、否な、其の正反対が事実であります」、「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」（「デンマルク国の話」岩波文庫）

20. 高い精神的文化に支えられた非軍事的小国という理想
愛国の意味の転換（＝民族・愛国のメタファー化）、政府・国家が間違った方向に進むとき、それを批判するのは愛国である。
21. I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.
排他的民族主義でも、抽象的な普遍主義（コスモポリタニズム）でもなく。
「民族」に何によって肯定し、相対化するのか。
22. キリスト教信仰（聖書研究→平和の理念・預言者の社会批判）＋科学的思考方法
自己中心的な民族主義を批判しキリスト教的平和思想を現実化するためには、心の純粹さと知性とが一体になる必要がある。
「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10:16）。
↓
23. 理論構築の必要性、政治神学
ナショナリズムとキリスト教：普遍と特殊は二分法的な対立概念か？
特殊な普遍。普遍という批判規準、特殊という形成原理

4. むすび

24. 神学フォーラムから見えてきた課題
フォーラムは研究者・神学者の交流の先に何をめざすのか
25. 神学者、研究者の交流の世代を下げること→人間を育てる課題
若手の発表をサポートする仕組み
26. われわれの問いとして、日本基督教会はどこへ向かうのか
神学フォーラムを学会全体の活動として展開することは可能か？

<参考文献>

1. 芦名定道「東アジアにおける宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて 【下】 共生への問い』（京都大学文学部創立百周年記念論集）京都大学学術出版会、2007年、279-301頁。
2. 宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
『日本の政治宗教 天皇制とヤスクニ』朝日新聞社。
3. 稲垣真美『兵役を拒否した日本人一灯台社の戦時下抵抗一』岩波新書。
4. 村上重良『国家神道』岩波新書。
5. 島藪 進『国家神道と日本人』岩波新書。
6. 小熊英二『<民主>と<愛国>——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
7. 高橋哲哉『教育と国家』講談社現代新書、『靖国問題』ちくま新書。
8. メディアの危機を訴える市民ネットワーク（メキキネット）編
『番組はなぜ改ざんされたか——「NHK・ETV事件」の深層』一葉社。